

外国の学会発表は大変で面白い

鈴木 義浩

柴田科学株式会社 開発部

1993年に初めて学会発表をさせて頂いて以来、細々と研究発表を行ってまいりましたが、早いもので20年近くが経ちました。これも諸先生方、関係各位のご指導・ご協力によるものと思います。さて、今年初めてIndoor Air 2016(The14th International Conference of Indoor Air Quality and Climate)に参加し、小口頭発表にチャレンジ致しました。私事ですが今回の発表に至るまでの海外での学会発表体験、失敗談などについて書き留めてみたいと思います。

ここ数年、私は米国のAIHce(American Industrial Hygiene conference and exposition)に参加させて頂いております。ここではsemi-active samplerの作業環境測定、室内環境測定におけるnicotine測定の研究報告を実施しております。ただ英語力のなさから口頭発表ではなく、ポスター発表での参加という恥ずかしい現状ではありますが3年連続で参加させて頂いております。海外の学会発表への初チャレンジは、2013年にモンリオールで開催されたAIHceです。エントリーしたところ、演題をrejectされてしまい海外の学会の厳しさを感じました。「査読の結果残念ながら今回は内容が不十分なため技術コンファレンスには参加ができません」という結果でした。このとき反省したのは、「多少英語があいまいであっても採用されるだろう」という甘えでした。また、学会事務局との手続きの基本的な流れ、英語のやり取りなど、馴れていなかったという問題点もありました。

そこで、過去に同学会で発表された研究発表内容を確認し、どのように自らの研究を伝えているかを研究致しました。その結果多くのポイントに気づき、中でも内容を多岐にせず、いちばん伝えたい事に絞って要旨をまとめる事が重要であると認識しました。それでも英語に不安があり、念を入れて社内の海外部門の方に校正を頼み、申請を行うことに致しました。これにより念願の海外発表デビューを2014年にテキサス州サンアントニオで開催されたAIHceにて実現しました。この時の発表は私にとって忘れられない体験となりました。私のポスターはポスター展示会場の端にあり、非常にさびしい状況でありました。それにも関わらず、ご覧になられた方の名刺が数枚、私のポスターにピン止めされており、関心の高さに手ごたえを感じました。大変な驚きと嬉しさと同時に、海外の研究者の新しいものに対する好奇心が直接伝わってきました。積極的に前向きに対応することの大事さを知り、つたない英語で多くの研究者と話すように務めました。しかし、ポスター前での説明では言葉が足りず歯がゆい思いもしましたが、同じ研究者同士であると言葉は足りませんがテクニカルタームを用いて理解を進めることができる事を実感しました。また、これは米国特有かもしれませんが、相手の主張に対して反論があるならば必ず伝えることが大事だという事も実感しました。たとえ相手の主張が正しいと感じても、自分はこう思うからこうしたのだと、きちんと説明することが研究者として重要であるということ学びました。

こうして冒頭で述べました、2016年7月にベルギー-Ghentにて開催されたIndoor Airにおいて、ポスター発表と小口頭発表(3分)を行い(本学会年会と同様な方式です)、ようやく人前での発表を経験する事ができましたが、自信をもった内容であったかというとまだまだです。台湾、中国の留学生は流暢に英語で語ります。今回日本からも多くの本学会の研究者の方々のご発表されておりまして頼もしく思えました。しかし数の上でこれらアジアパワーに押されている感じが致します。この拙文が皆様の海外発表のきっかけになり、本学会の研究者の方々海外でさらにご活躍いただくことになれば幸いです。